

自然遊学館 だより

2011 SPRING

No.59



自然遊学館で飼育しているマダコ「みさきちゃん」の子どもたちが生まれました。写真でみると何だか宇宙人みたいです。

2011.5.25 発行 貝塚市立自然遊学館

目次

*ネイチャーレポート

- 近木川河口のカワザンショウガイ科 …和田太一… 1
 泉州お魚採集記 ゴクラクハゼ ……三宅壽一… 3
 二色の浜人工海岸でのヤドカリ調査 ……覚野信行… 4
 外来生物の扱いについて ……岩崎拓… 6

*行事レポート

- 春の七草摘みハイキング ……白木江都子… 8
 打上げ貝拾い ……山田浩二… 9
 千石荘&河口バードウォッチング ……和田太一… 11
 海藻おしば ……山田浩二・河原美也子… 12
 自然を食すⅢ ……川村甚吉… 13

*館長コーナー

- 桜に思う ……高橋寛幸… 15

*泉州生きもの情報

- アカウミガメの死亡漂着！！ ……山田浩二… 16
 二色の浜に打上げられたアケボノキヌタ
 の新鮮な死殻 ……山田浩二… 17
 ノウサギの足跡 ……山田浩二… 17
 ウソ ……鈴子勝也… 18
 ヒメスミレ ……湯浅幸子… 18
 *寄贈標本の紹介 …… 19
 *新スタッフ紹介 ……今井健太… 20
 *スタッフ日誌 …… 20
 *お知らせ …… 21

ネイチャーレポート

近木川河口のカワザンショウガイ科

カワザンショウガイ科は主に河口域のヨシ原など塩性湿地に生息している、殻高が5ミリ前後の小さな巻貝のグループです。国内からは十数種が知られていますが（増田・内山、2004；長谷川、2000）、貝類の中でも分類学的な研究が遅れているグループで、実際にはまだ図鑑にも載っていない未記載種が数多くいるようです。

筆者は2009年から2010年にかけて近木川河口で底生生物を調査している際に（山田・和田、2011）、汽水域のヨシ原で5種類のカワザンショウガイ科が生息しているのを確認しました。

- ・クリイロカワザンショウ
Angustassiminea castanea
- ・クリイロカワザンショウ属の一種
Angustassiminea sp.
- ・ヨシダカワザンショウ
Angustassiminea yoshidayukioi
- ・ヒラドカワザンショウ
Assiminea hiradoensis
- ・ムシヤドリカワザンショウ
Assiminea parasitological

大阪湾南部の河口周辺の貝類を紹介した児島（2006）にはクリイロカワザンショウ、サツマクリイロカワザンショウ（※）、ヒラドカワザンショウ、ムシヤドリカワザンショウの4種類が掲載されていますが、今回の調査ではそれらに加えてヨシダカ

ワザンショウも見つかりました。

カワザンショウガイ科は同じ河川のヨシ原でも地盤高や湿度、塩分濃度などによって微妙な棲み分けをしていて、干潟の埋め立てや河川改修、堤防の工事などによる塩性湿地の消失によって絶滅が危惧されている種もいます。

ヨシダカワザンショウ（図1）は全国的にも報告例の少ない種で、環境省のレッドリストで「絶滅危惧Ⅱ類」に選定されています。ヨシ原内でもほとんど水没しない最も高い場所に分布し、また同じ汽水域の中でも上流側に分布の中心があることが知られています（Kuroda *et al.*, 2003）。



図1. ヨシダカワザンショウ

ムシヤドリカワザンショウ（図2）は環境省で「準絶滅危惧」、大阪府レッドデータブックで「情報不足」とされており、福田（2000）ではヨシ原の状態が悪化したときにまず最初にいなくなるのが本種であるとしています。

カワザンショウガイ科の種の多様性は塩性湿地の環境の多様性と健全さを表していると言えるでしょう。



図 2. ムシヤドリカワザンショウ

筆者は大阪湾奥部の淀川汽水域でも1990年代後半から底生生物の調査・観察を続けていますが、淀川汽水域ではヨシ原にはカワザンショウ *Asiminea japonica* が多産していて、あとはクリイロカワザンショウ属の一種がごくわずかに見つかるのみです。ムシヤドリカワザンショウの採集記録が1950年代にあります(大原・大谷、2002)、現在は見つからず、高水敷の工事などによるヨシ原の消失や環境の変化からか、種の多様性が減少しているものと考えられます。

近木川河口のヨシ原は決して広くありませんが、大阪湾内でこれほど多様なカワザンショウガイ科が確認される場所にはなく、大変貴重な場所であると言えます。カワザンショウガイ科はとても小さく目立たない存在ですが、ヨシ原の中の小さな巻貝を調べることが近木川河口や汽水域の環境の変化を知ることにもつながってくるかもしれません。今後も生息状況を注意深く見守っていく必要があるでしょう。

(※) サツマクリイロカワザンショウとして図鑑等に掲載されている種(クリイロカワザンショウに似るが軟体が白いもの)は、今後の研究で複数の種に分けられる可能性が高く、今回近木川河口で見つかったものもクリイロカワザンショウ属の一種として扱いました。

引用文献

- 福田宏 (2000) 巻貝類 I - 総論. 佐藤正典(編), 有明海の生きものたち. 海游舎, 東京. pp. 124-126.
- 長谷川和範 (2000) カワザンショウガイ科. 奥谷喬司(編), 日本近海産貝類図鑑. 東海大学出版会, 東京. pp. 166-169.
- 児島格 (2006) 大阪湾 男里川・近木川河口周辺に生きる貝. きしわだ自然資料館. pp. 12-13.
- Kuroda, M., Wada, K., Kamada, K., Suzukida, K. & Fukuda, H. (2003) Distribution patterns of assimineid species (Gastropoda: Rissooidea) in the salt marshes of the Yoshino River, Tokushima Prefecture, Japan. *The Yuriyagai*, 9(1): 21-31.
- 増田修・内山りゅう (2004) 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類. ピーシーズ, 東京. pp. 104-110.
- 大原健司・大谷洋子 (2002) 西宮市貝類館所蔵黒田徳米博士標本目録(1) 非海産腹足類. 貝類西宮市貝類館研究報告, 1: 22.
- 山田浩二・和田太一 (2011) 近木川河口干潟の底生生物調査(2009年). 貝塚の自然 第13号: 8-11.

(NPO 法人南港ウェットランドグループ
和田太一)

泉州お魚採集記

ゴクラクハゼ



ゴクラクハゼ 学名 *Rhinogobius giurinus*

スズキ目ハゼ科ヨシノボリ属に属する。他のヨシノボリ類に比べ、もっとも下流に生息する。最大で約 10cm。大阪府では南部の河川（近木川、榎井川や男里川など）の汽水域～下流域で見ることが出来る。大阪府レッドリストでは絶滅危惧Ⅰ類に指定されている。

では、実際に採集、観察に出かけてみましょう。一例として、阪南市と泉南市の間を流れる男里川で説明をします。男里川にかかる橋の中で一番下流に府道 250 号線の菟砥橋^{うどし}があります。この周辺がもっともよく見られます。河口に近いカキ殻の付いてるような塩分の多いところではまず見られません。

採り方のコツとしては、川岸に近い流れのゆるやかな水深 10～30cm の辺りにあるちょっと大き目の石を狙います。ゴクラクハゼはこのような石や障害物の下に隠れています。流れの真ん中や流速の速いところではほとんど採れません。手ごろな大きさの石を見つけると、川岸に向かって、石をはさんで川の深い側に立ち、石のすぐそば（深い方）にタモ網を立てます。この時、タモ網を軽く上流側に向けると、網の部分

が水の流れによって大きく拡がり、魚が入りやすくなります。また、タモ網の先をしっかり底に押し付け、下から逃げられないようにします（タモ網は丸型よりも先の平たくなったのが使いやすいです）。用意ができれば足を使って石をめくるようにひっくり返します（手でも構いません）。魚が網の方向に逃げるように、とイメージすると良いでしょう。石をひっくり返して魚が入ったと思ったらすぐにタモ網を上げます。ゆっくりしてると逃げられますよ。

以上です、どうです、簡単でしょう。この方法だと、石の下に隠れてる魚なら何でも採れます。プラケースに入れて観察するとゴクラクハゼの特徴のひとつ、体側に青い点々があります。とてもキレイに光って、いつまでも見ていたいと思いますが、長時間バケツやプラケースに入れておくと酸欠となり弱ってしまいます。観察が終わったら、そ〜っと元の水に戻してあげましょう。泉州には多く生息していても、大阪府では一番ランクが上の希少な魚ですから。



男里川で魚類採集

（阪南市 三宅 壽一）

二色の浜人工海岸でのヤドカリ調査

二色の浜公園海浜緑地の人工海岸には、転石を積み重ねて磯浜のようにしてある部分があります。自然遊学館の山田さんによると、その場所では、冬になるとヨモギホンヤドカリがたくさん現れてくるのだそうです。海岸にいる生き物は普通、暖かくなると活動を始め、冬になると姿を消してしまいます。しかし、このヨモギホンヤドカリは寒くなると活動を始め、夏場は隠れていなくなってしまうという変わった生活をしています。



二色の浜公園海浜緑地

そこで、本種を含めたヤドカリ類の活動時期を調べるために、上記の場所で 2010 年 1 月から同年 12 月まで、月 1 回採集をすることにしました。当初は竹輪などの餌を入れたカゴを海岸に設置して、ヤドカリ類を集めようとしたのですが、カゴがなくなっていたりするので、2 月からは手で拾い集めました。

その結果は、表 1 のようになりました。本種は 4 月頃には姿を消し、11 月に再び多くなります。特に 1 月 2 月と 12 月は、そ

の個体数がとても多くなり、いくらでも採集できる状態でした。また、夏期にはホンヤドカリが現れてくることも分かりました。5 月と 10 月にはヤドカリ類がほとんど採集できず、両種は接触することがあまりないように思います。両種は活動時期を違えることによって、同じ場所で生活しているとも考えられます。

ホンヤドカリの活動時期は 6 月から 9 月にかけての夏期ということになりますが、なぜか 8 月にはあまり採集されませんでした。ホンヤドカリは水面より上の部分でよくいました。夏でもあまりに暑すぎる時は、水中に避難しているのではないかと考えています。

逆にヨモギホンヤドカリは水面下にたくさんいました。冬でも暖かい日もあれば、とても寒い日もあります。水中の方が温度が安定しているためかもしれません。

表 2 にはヤドカリ類が使用していた貝殻の種をまとめました。ヤドカリは棲み場所に落ちている貝殻を使用しているはずで、種類や個体数は調べていませんが、調査場所の護岸の積み石や転石には生きた貝もたくさん付着しています。ヤドカリ類が一番利用していたのはコシダカガンガラで、この周辺にはコシダカガンガラがたくさんいるのだと思われます。それに対して、近木川の干潟に生息するユビナガホンヤドカリはアラムシロガイの殻をよく使用しています。

最後に本報告をまとめるにあたり、ご協力いただきました自然遊学館の皆様にお礼申し上げます。

(泉佐野市 覚野 信行)

表1. 二色の浜人工海岸において2010年の各月に採集されたヤドカリ類の個体数

調査日	潮位 (最干潮時)	採集時間	ヨモギホン ヤドカリ	ホン ヤドカリ	ケアシホン ヤドカリ
1月6日	75cm (17:35)	干潮時にトラップで採集	52	1	0
2月20日	56cm (17:01)	17時頃採集	52	1	0
3月20日	36cm (15:41)	15分 (15:25 ~ 15:40)	24	0	0
4月18日	16cm (15:23)	20分 (15:10 ~ 15:30)	8	1	0
5月15日	-1cm (13:45)	15分 (13:45 ~ 14:00)	0	0	0
6月27日	2cm (13:34)	15分 (13:35 ~ 13:50)	1	24	0
7月25日	10cm (12:47)	10分 (13:00 ~ 13:20)	1	19	1
8月22日	24cm (12:00)	20分 (11:40 ~ 12:00)	0	5	0
9月20日	42cm (11:31)	10分 (11:20 ~ 11:30)	0	14	0
10月23日	75cm (12:44)	10分 (12:35 ~ 12:45)	0	2	0
11月23日	97cm (13:35)	15分 (13:30 ~ 13:45)	18	0	0
12月23日	95cm (14:06)	10分 (13:45 ~ 13:55)	83	0	0

表2. ヤドカリ類が使用していた貝殻種

数値はヤドカリ類の個体数を示している。

()内は採集数が少なかった方のヤドカリが使用していた殻種(表1参照)

調査日 \ 殻種	コシダカ ガンガラ	イシダタミ	イボニシ	タマキビ	アラムシロ	その他
1月6日	40	8(1)	2	2	1	0
2月20日	27(1)	2	12	1	2	(*)
3月20日	20	0	2	0	1	サザエ1
4月18日	5(1)	3	0	0	0	サザエ1
5月15日	0	0	0	0	0	0
6月27日	24(1)	0	1	0	0	0
7月25日	17(2)	1	2	1	0	0
8月22日	2	1	1	0	1	0
9月20日	0	8	3	0	0	スガイ3
10月23日	0	1	0	0	0	スガイ1
11月23日	12	1	5	0	0	0
12月23日	57	12	9	3	2	0

2月20日のその他 : (*) レイシ5、ムギガイ1、コベルトカニモリ1、ヒメヨウラク1

外来生物の扱いについて

2月7日に自然遊学館わくわくクラブの主催で開催された「第2回小さいとこサミット」の第2部では、外来生物をどう扱えば良いのか（博物館学芸員としてどう説明すれば良いのか）が話し合われました。ここでいう外来生物とは、江戸時代の長い鎖国期以後に入ってきたものを指します。

当クラブの佐藤拓二さんによる「子を持つ親として外来生物を殺せ、差別しろとは言にくい」、白木茂さんによる「館としてマニュアルを作成しているところがありますか？例えば、自然遊学館でも人によって言っていることが違う」、という問題提起がなされました。

自分自身は、市民の森公園内のビオトープ「トンボの池」で駆除しているアメリカザリガニ（図1）は、自然遊学館で飼育しているウナギ、ドンコ、カワアナゴなどの餌として利用しています（金魚などの市販の餌を購入するよりも経済的に助かります）。また、大きなザリガニが採れた場合は、触ってみようコーナーで展示したり、飼育展示しているウシガエル（図2）の餌として利用しています。このウシガエル自体も外来生物（特定外来生物に指定）で、近畿環境事務所の許可を得て飼育しています。



図1. アメリカザリガニ
(子供たちには人気があるのに...)



図2. ウシガエル
(私って嫌われもの?)

例えば、ウシガエルは環境省が定める「特定外来生物」に、アメリカザリガニは「要注意外来生物」に指定されています。特定外来生物には他に、アライグマ、オオクチバス、ブルーギル、セアカゴケグモなどが含まれ、飼育・運搬・保管が禁止されていて、違反すると罰則があります。それに対して、ミシシippアカミガメ、グッピー、スクミリンゴガイなどが含まれる要注意外来生物には、禁止・罰則規定はありませんが、不用意に分布を広げないように注意が促されています。

また、野外での行事において外来生物が採集された場合も、「その場で殺しましよ」と言うよりは、「遊学館で餌として利用します」と言った方がやりやすく、自分

自身は外来生物問題をあまり深く考えてきませんでした。

外来種が、特定、あるいは要注意外来生物に指定される理由は、

- ①□人に危害を加える、有毒
- ②□地域固有の生態系に影響を与える
- ③□農作物を食害する

の3つにまとめられます。かつて遊学館に持ち込まれたセアカゴケグモやカミツキガメ(図3)は、明らかに①の理由で指定されたものです。外来生物を殺していいのか、命を奪っていいのか、という問題が顕在化するのには、②の生態系への影響で、ある外来種がある在来種を完全に駆逐してしまう(地域で絶滅させる)ことがあるのか明白ではない場合でしょう。アメリカザリガニとウシガエルは、この難しい②のケースに当てはまります。③の代表例はアライグマです(図4)。



図3. カミツキガメ
(怖がらないでと言っても無理かなあ～)



図4. アライグマ
(かわいいと言ってくれた人もいたのに...)

今回のサミットでの意見交換では、多賀町立博物館の金尾滋史さんが「外来生物は居てはいけないもの、その居てはいけない理由を、どうしてこの場所にいるのか(経緯)、放すとそれが生き延びて繁殖し、また同じ事態で悩むことになる、など言葉を尽くして教える」と言われました。これが日本固有の生物や生態系から見た正しい答えではないかと思います。次に別の外来生物を持ち込ませない「抑止力」も持っていると思います。

ただ、誰もが悩むのは子供たちに「外来生物は殺しましょう」と言えるかという点で、佐用町昆虫館の八木剛さんが言われた「教える年齢を考える。低年齢には知らなくていいこともあるのではないか」という発言が、自分がこれまでそのような考えを持っていなかったのが、印象的でした。

途中で、当クラブの保田淑郎顧問があげた具体例「孫がウシガエルのおたまじゃくしを大量に捕まえた。どうすればよかったのか？」で問題点がより整理されたと思います。その際、アクアピア芥川から参加された花崎勝司さんの「解剖などの教材として使うと伝え、冷凍しておく」と答えられ、

遊学館の「飼育している動物の餌にする」と同じく、いかにも現場の方の答えだと思いました。それで自分の答えはと言うと、保田顧問と同じく、池に逃がすでも殺すでもなく、オタマジャクシが入ったバケツをそのまま置いて帰るです。鳥やネコに食べてもらえる可能性があるからです。

結局、サミット前から考えてきた、「人が外来生物を食べることも含めて、繁殖して増えないように配慮しつつ食物連鎖に組み込む（＝命を無駄にしない）」というのが良いのではないかと考えがまとまりました。次に持ち込ませないための抑止力という点では劣りますが。ただ、考え方の幅が広がったのは、自分の大きな財産になりました。このような企画を組んでいた小さいとこサミットの関係者、ならびに自然遊学館わくわくクラブの方々に感謝します。

(岩崎 拓)

行事レポート

春の七草摘みハイキング

日時：2011年1月6日（木）10:00～12:30

場所：蕎原ほの字の里周辺

参加者：34名

今年はクリスマス寒波、お正月の冷え込みと続き、ピリピリと寒い朝でした。ほの字のグラウンドに10時に集合、スタッフ紹介に続き「七草」の説明をしました。セリ・ナズナ・ゴギョウ・ハコベラ・ホトケノザ・スズナ・スズシロの七草です。前日館長の畑周辺で摘んで用意していた、セリ、ハハコグサ、ハコベ、コオニタビラコなどを見てもらいながら説明しました。ゴギョウは現在のハハコグサ、ホトケノザは現在のコオニタビラコをさします。スズナは蕪、スズシロは大根です。「ナナクサナズナ、唐土の鳥が・・・」と唄いながらトントンと包丁の音をたてて七草を刻み、七草がゆを作る話もしました。

ほの字の里の坂を降りてすぐの田んぼのあたりで七草を探しました。ハコベはどこでも目に付きます。日当たりの良い空き地のような土地ではナズナが生えていました。毎年あまり見つからないハハコグサもあり、よく見ると、コオニタビラコ・セリもパラパラと見つかり、ここで5種全てを見つけることができました。その他まちがえやすい植物としてタネツケバナ、イヌガラシ、オランダミミナグサ、オオイヌノフグリなどがあり、ここでしっかり「七草」を観察しました。



七草を探しました

もう少し沢山見つけるために、さらに先に進みました。道端にはハコベ、水路にはセリ、田んぼにはコオニタバコがロゼット状に張り付いていました。途中フユイチゴが赤い実をつけていて、子どもたちは食べながら進みました。ほの字の里に戻って、七草粥をおいしくいただき「スズナ、スズシロ」をいれた七草セットをお土産に解散しました。



ほの字の里で七草粥を頂きました

(白木 江都子)

打上げ貝拾い

日時：2011年2月6日(日) 13:00~15:30

場所：二色の浜、自然遊学館多目的室

参加者：39人

記録的な寒さの1月でしたが、2月に入りようやく平年並みの気候になった中で、本行事を実施することができました。例年、近木川河口の右岸で行っていた行事ですが、今年は二色の浜でも貝殻やカニなどの打上げが多かったため、場所を移して行いました。

参加者は自然遊学館にお集まりいただき、午後より行事を始めました。講師には例年のように日本貝類学会所属で、当館の客員講師でもあります児嶋 格さんにお越し頂きました。二色の浜まで徒歩で移動した後、まず児嶋先生より、打上げ貝の種類は、沖の海底の状態(砂地や泥地など)で大きく決まることや、打上げ貝を拾うコツについて説明を聞きました。そして1時間ほど、各自で打上げ物を拾い集めました。

アサリやホトトギスガイなどの二枚貝や、タイワンガザミが多数打ちあがっているのが目立っていました。また、シリヤケイカやコウイカ科の一種の甲や、オカメブクというウニの仲間も割合多く打ちあがっていました。参加者全員の拾い集めた打上げ物は表1の通りですが、多くの種類が出たのはやはり貝類で、海産の巻貝(腹足綱)が20種類、二枚貝が19種類でした。



二色の浜で打上げ貝を拾う

それから館に戻り、多目的室で、拾い集めた貝殻を紙皿に貼って記念のオブジェを作製しました。自分の拾った貝の中からよりすぐりの貝殻を選んで、紙皿に好きなようにレイアウトして貼っていく作業に子供たちは熱中していた様子でした。自分の拾った愛着のある貝殻の名前を忘れないように、貼り付けた貝の下には、その貝の種名も記してもらいました。こうして完成した貝のお皿は、各自持って帰ってもらい、行事を終えました。



打上げ貝で記念の飾りを作製

海辺の打ち上げ観察会

貝塚市立自然遊学館

グループ	和名		二色浜 2011/2/6 39人
腹足綱	ヨメガカサガイ科	ヨメガカサ	rr
	ニシキウズ科	コシダカガンガラ	r
		イシダタミ	rr
		チグサガイ	rr
	サザエ科	サザエ	rr
	ソデボラ科	シドロガイ	rr
	カリバガサガイ科	シマメノウフネガイ	c
	ムカデガイ科	オオヘビガイ	r
	タマガイ科	ツメタガイ	c
		アダムズタマガイ	r
		オオネズミガイ	rr
		ネコガイ	rr
	アツキガイ科	イボニシ	rr
		アカニシ	r
	フトコロガイ科	ムギガイ	r
	ムシロガイ科	アラムシロ	c
		ムシロガイ	r
	イソチドリ科	イソチドリ	rr
	ブドウガイ科	ブドウガイ	rr
	カラマツガイ科	カラマツガイ	rr
二枚貝綱	フネガイ科	カリガネエガイ	r
		サルボウガイ	r
	イガイ科	ムラサキイガイ	r
		ホトギスガイ	cc
	ハボウキガイ科	タイラギ	r
	イタヤガイ科	イタヤガイ	rr
	ナミマガシワ科	ナミマガシワ	c
	イタボガキ科	マガキ	c
	ザルガイ科	トリガイ	rr
	バカガイ科	バカガイ	c
	ニッコウガイ科	ヒメシトリガイ	rr
	シオサザナミガイ科	イソシジミ	rr
	マテガイ科	マテガイ	r
		アカマテ	rr
	マルスダレガイ科	オニアサリ	rr
		カガミガイ	c
		アサリ	cc
	オオノガイ科	ウチムラサキ	r
		オオノガイ	r
	淡水産	タニシ科	ヒメタニシ
リンゴガイ科		スクミリンゴガイ	r
陸産	アズキガイ科	アズキガイ	rr
	オナジマイマイ科	オオケマイマイ	rr
頭足綱	コウイカ科	シリヤケイカ	c
		コウイカ科の一種	r
甲殻類	キンセンガニ科	キンセンガニ	rr
	コブシガニ科	ツノナガコブシガニ	r
	ガザミ科	タイワンガザミ	cc
	モクスガニ科	モクスガニ	rr
ヒトデ類	モミジガイ科	トゲモミジガイ	rr
ウニ類	サンショウウニ科	サンショウウニ	r
	ヒラタブンプク科	オカメブンプク	c
魚類	ボラ科	ボラ	rr
	ヨウジウオ科	ガンテンイシヨウジ	rr
計			52

凡例：数量……cc 多数、c 普通、r 少数、rr ごく少数

(山田 浩二)

千石荘&河口バードウォッチング

日時：2011年2月27日（日）10:00～16:00

場所：千石荘、近木川河口

参加者：17人

天気は朝から快晴になり、2月とは思えないほどのぽかぽか陽気の中での開催となりました。集合場所の「こすもすの里」バス停で参加者の方々を待っていると、ジョウビタキのメス、ベニマシコの雌雄、アオジ、シジュウカラなどが次々と出現しました。

最初に川村自然遊学館長の挨拶と講師紹介があり、貝塚市の野鳥の観察を続けている食野俊男さんからコースと見どころの説明の後、参加者と共にゆっくり歩きながら野鳥の姿を探し始めました。里山の林の中の道を歩きながら、よく耳をすませると、「ビービー」と少し濁ったヤマガラスの鳴き声や、「ギイー」というコゲラの鳴き声、「ジュール、ジュール」と鼻をすするようなエナガの鳴き声など、様々な野鳥たちの鳴き声が聞こえてきました。木々の間を飛び回る小鳥たちの姿を双眼鏡で捉えるのはなかなか難しかったですが、コゲラは参加者たちのすぐ上の木に止まって、木の幹を突いて餌を探している様子が見られました。竹やぶの中からはウグイスのさえずりが聞こえてきて、もういよいよ春が近いことを感じました。

農耕地に出ると、まず上空をノスリとトビが旋回し、林の中からはシロハラの慌てた鳴き声と共にそれを追いかけてハイタカが勢いよく飛び出してきました。いつもならよく見られるというオオタカが残念



千石荘で鳥を探す

ながら見られませんでした。次々に猛禽類が現れたひと時でした。畑の周囲にはカシラダカやカワラヒワが木に止まっています、少し遠かったのですが羽根の模様、嘴の色や尾羽の形など望遠鏡をのぞきながら参加者全員で特徴を確認しました。畑にはツグミの姿もよく見られました。バス停に戻り、千石荘で見られた主な鳥を簡単に紹介して一旦解散しました。

午後からはまた自然遊学館に集合し、近木川河口で水辺の野鳥を観察しました。河口部ではヒドリガモの群れがいて、河口部に生える緑藻類などを盛んに食べていました。その中にオナガガモの雌雄が混じっていて、雄の特徴的な長い尾羽や首の模様などを観察しました。河口の海浜部にはマヒワの姿も見られ、黄色のオスと少し地味なメスの姿の違いを見比べることが出来ました。この冬はマヒワが多いようで、大阪でも各地でマヒワの群れが観察されています。小学生の子供たちも自分の持ってきた図鑑をめくって野鳥を一生懸命に調べていました。

汽水域では造成中のワンドの中にアオ

サギやカルガモが休息していて、少し上流でカワセミの出現を待っていると、コガモの群れと河口部ではあまり見られないキセキレイも出現しました。残念ながらカワセミは現れませんでした。マヒワの群れがまた現れ、一緒にいたカワラヒワとの違いもよくわかりました。里山と河口部をゆっくりと回って、貝塚市の野鳥たちの姿とその暮らす環境をじっくりと見ることが出来た一日となりました。

千石荘で観察された野鳥

カイツブリ、カワウ、アオサギ、トビ、ノスリ、ハイタカ、コゲラ、ヒヨドリ、ジョウビタキ、シロハラ、ツグミ、ウグイス、シジュウカラ、ヤマガラ、エナガ、メジロ、ホオジロ、カシラダカ、アオジ、カワラヒワ、ベニマシコ、ムクドリ、ハシボソガラス

近木川河口で観察された野鳥

カワウ、カルガモ、コガモ、ヒドリガモ、オナガガモ、コサギ、アオサギ、シロチドリ、ハマシギ、イツシギ、キジバト、ハクセキレイ、キセキレイ、ヒヨドリ、ツグミ、カワラヒワ、マヒワ、スズメ

(NPO 法人南港ウェットランドグループ
和田 太一)

海藻おしば

日時：2011年3月6日(日) 13:00~16:00
場所：二色の浜、自然遊学館多目的室
参加者：28人

館内に展示している二色の浜の海藻おしば標本の製作者である河原美也子さんに講師にお越し頂き、海藻おしば作りを行いました。多目的室に参加者にお集まり頂いた後、二色の浜に足を運び、実際に生えているものや、波打ち際に上げられた海藻を観察・採集しました。



二色の浜で海藻を観察する参加者

館に戻り、ワカメの入ったお味噌汁を食べ体を温めてから、河原さんにスライドを用いて海藻について説明して頂きました。そして、いよいよお待ちかねの海藻おしば作りを体験しました。はがきサイズの台紙におもいおもいの海藻をちぎっては貼り付け、独創的な作品作りにみなさん熱中しているようでした。最後になりましたが、補助スタッフとしてお手伝い頂きました海藻おしばくらぶの傳さん、上田さん、森本さんに御礼申し上げます。

(山田 浩二)



海藻おしば作りにいそしむ参加者

河原さんからのメッセージ

(受講生へ海藻おしば作品を郵送する際に
同封したお手紙より)

この度は「海藻おしば」の体験を実施いただきありがとうございます。

海藻がもっと身近に感じていただけるようになられたのではないのでしょうか。

海の中にも海藻の造る森や草原が広がっています。そこは魚介類の住居や産卵の場となり、そのうえ、海水の浄化と言う大切な役割も果たしています。この海の植物たち（主に植物プランクトン）は、何十億年もかけて二酸化炭素を減らし膨大な酸素を放出してオゾン層を形成し、生物が海から陸へ移り住めるように地球環境を変えてきました。

今回は、伊豆半島の海藻や大阪湾の海藻を使いました。海藻おしばの材料となる海藻は、海がきれいでないとは育ちません。海が濁ってしまうと植物にとっての「ご飯」となる光が届かなくなり、海藻の森は消えてしまいます。

大阪湾にも豊かな漁場、豊かな藻場があります。山、陸、海は川でつながっていて、すべての水は海へと流れていきます。わたしたちの生活の影響をうけないように、海藻たちの暮らせる海の自然をいつまでも守っていききたいものです。

この度、東日本大震災において自然の驚異を感じました。被災された方々を思うと心が痛みます。今私たちが出来ることを積み重ねていかなければと改めて感じております。

この度は作品をお送りするのが遅くなりましたこと、お詫び申し上げます。

時節がら皆様御身体ご自愛いただけますようお願いいたします。またお目にかかれる日を楽しみにしております。

(海藻おしば協会関西支部長

河原 美也子)

自然を食すⅢ

日時：2011年3月26日(土) 12:00～14:20

場所：自然遊学館多目的室

参加者：23人

講師 調理 栗山 昭先生

栄養 大蔵洋子先生

目的 自然からの恵みを食し、春の季節を体感する

内容 主食 イカメシ

汁 ワカメの味噌汁

おかず 野草のてんぷら(イワシはおまけ)

デザート ヨモギもち
飲み物 柿の葉茶

時間前に集合してくれた方から配膳をお願いし、定刻通りスタートしました。それまでに、栗山先生はイカメシ、ワカメの味噌汁を用意され、できるだけ温かいものという気持ちでぎりぎりまでてんぷらを揚げてくれました。材料は今回の中心になります春の草花です。



ハコベ、レンゲ、カラスノエンドウ、ヨモギ、セリ、ツクシなどです。これらは、山里の人や犬たちの来ない全く自然そのものの草花たちです。それらを適当な大きさに切り、水分を取っててんぷらにしています。さすがは栗山先生です。その材料の特性を生かして、油の温度管理に気を配りながら作業を進めていかれます。

ただ、種類が多いのと、参加者の人数も多いということで量を受け入れるだけの皿やそれらを置くスペースがなくやや大盛りになり、区別できなくなったのもあったのが悔やまれます。

しかし、食事が始まりますと次々にお代

わりされ、嬉しい悲鳴です。イカメシは1.6升、汁は40人分くらいはあります。てんぷらは先ほども表現しましたように山のようにあります。それを40分ほどで食べつくしました。

あらかた片づけをし、いよいよ講義の時間です。大蔵先生はご自分の栄養学に基づいた説明はもとより、春の植物についてそれぞれの特性などまで説明してくれます。ユーモアたっぷりで参加者は話の面白さに引き込まれて行きます。就学前の人から熟年の方まで興味深く話を聞いてもらうには、ただ面白いだけでは続きません。大蔵先生のように今までの経験といつでも学習する姿勢が無くてはならないことでしょう。

昔は日常的に野の草花を食べて、体の栄養保持とともに薬にも活用されたことを含めた話を私のほうでさせていただきました。



最後に、今回の目玉の一つであります「てんぷら」の揚げ方について講習を受けました。ぱちぱち油がはぜて困る「イカ」を材料に一人ひとり実演しながら教えて

くれました。温度管理と粉の練加減がてんぷらの出来を左右するという事です。



そして、イカなどの場合はイカの体内に残っています水分を出すために切り込みを入れておくことも大切だと教わりました。

(川村 甚吉)

館長コーナー

桜に想う

今年4月より、自然遊学館に勤務することになりました高橋です。よろしくお願いします。私のここ数年の春の楽しみは、満開の桜を見ることでした。

ブリタニカ国際大辞典によると

『桜』：バラ科、さくら属の中で美しい花を咲かせる十数種の総称。昔から日本の国花として愛好され……略……、とあります。

美しい花が木々いっぱい咲き誇る桜を眺めることは、昔から人の心に元気を与え活気をもたらしてくれたのでしょう。

最近のニュースでも、東日本大震災の東北で咲いた桜に元気をもらった人々も多い、と聞きます。そんな桜に想いを込めて私も今年一年元気で頑張りたいと思います。

最後に一言、がんばれ東北！がんばれニッポン！

私が出会った元気の出る桜から



海津崎の桜（昨年4月）



河津の桜（今年3月）



中山寺の桜（今年4月）



富士を望む芝桜

（高橋 寛幸）

泉州生きもの情報

アカウミガメの死亡漂着！！

二色の浜公園海浜緑地において、2011年1月5日、アカウミガメの死亡漂着が分かりました。現地では2009年8月8日にも本種の死亡漂着がありましたが（本誌No. 53）、今回のものはかなり腐敗がすすんだ個体でした。貴重な記録として、骨格は大阪市立自然史博物館と共有して保管することにしました。



二色の浜に死亡漂着したアカウミガメ
（2011年1月5日）

【データ】

体長：約1m

漂着場所：二色の浜公園海浜緑地

発見日：2011年1月5日 午前10時半

発見者：国岡 巖（二色の浜公園管理事務所）

砂利から甲羅の後半部のみ露出した状態でみつかると。当日、掘り起こして撮影。腐敗進み、頭部白骨化、甲羅二つ折れ。

（山田 浩二）

二色の浜に打上げられた アケボノキヌタの新鮮な死殻

2011年1月23日、二色の浜のほぼ中央に位置するレストハウス前の海岸で二枚貝のアケボノキヌタ（シオサザナミ科）の死殻2例を採集しました。貝塚市では生貝、死貝ともこれまで記録のない種です。2例とも両殻が靭帯で連結され閉じた状態の個体でした。1個体はまだ肉の残った新鮮な死殻で、殻長は約9cmの立派な大きさでした。潮間帯下部の砂泥底に生息することが知られており、おそらく二色の浜で育つたものと考えられます。

また、阪南市の波有手浜海岸でも同年1月の末に、三宅壽一氏が本種の死殻を1例採集し、本館に持ってこられました。この冬は寒波がきつく、海も荒れることが多かったのですが、その分、海からの贈り物である打上げは例年になく珍品も多く、本種のほかにも二枚貝のイソシジミや、ウニの仲間のブンブクチャガマなどが見られました。



二色の浜に打上げられたアケボノキヌタ
(2011年1月23日、殻長：約9cm)



ブンブクチャガマ
(二色の浜打上げ、2011年1月25日)

(山田 浩二)

ノウサギの足跡

2011年2月12日はめずらしく貝塚市にも雪が積もった日で、千石荘でバードウォッチング行事の下見をしていると、雪上に見慣れぬ足跡を見かけました。デジカメに記録を残し、後で文献にあたるとノウサギの足跡でした。大きな足跡は後ろ足、小さな足跡は前足です。雪が積もると、動物の足跡がくっきりと残るのでおもしろいですね。



ノウサギの足跡（千石荘）

(山田 浩二)

ウソ

このタイトルはうそではありません。ウソという鳥がいるのです。今年から食野俊男さん、石井葉子さん、スタッフの岩崎さんと一緒に和泉葛城山で鳥類の調査をすることにしました。2月の調査日には、ウソの写真を撮影することができました。



ウソのオス成鳥
(和泉葛城山山頂、2011年2月24日)

ウソのオス成鳥は白黒の写真では分かりませんが胸のあたりがきれいな紅色をしています。それに対してメス成鳥は胸のあたりが紅色ではなく茶色い色をしています。冬鳥で、3月22日の調査でも確認されましたが、4月にはもう確認できませんでした。

冬は多くの木々の葉が落ちて撮影しやすい時期です。これからだんだんと山の鳥類が撮影しにくくなる季節になります。でも、良い写真が撮れたら、また報告しますね！

(鈴子 勝也)

ヒメスミレ

3月にはいると、道端に春の草花が伸びてきます。自然遊学館周辺の歩道沿いに、小さい紫色のヒメスミレが並びます。スミレに比べ高さ5センチぐらいと小さく、葉柄にはヒレがありません。毎年同じ場所で花をつけます。ぜひ、毎年のお会いを楽しんでください。



ヒメスミレ (すみれ科)

(湯浅 幸子)

寄贈標本の紹介

以下の方々より標本を寄贈していただきました。お礼申し上げます。

(※2011年3月分まで)

<哺乳類>

◆梶夏葉・伊藤朱里・佐々木祐奈・佐々木楓奈さんより

チョウセンイタチ 死体1点

貝塚市二色の浜 2011年3月5日採集

- ◆菅野雄太郎・菅野太久真・菅野日出太さんより
イタチの一種 死体1点
貝塚市二色の浜 2011年3月6日採集

<鳥類>

- ◆自然遊学館わくわくクラブより
メジロ 巣1点
岸和田市河合町 2011年3月20日採集

<魚類>

- ◆川口博さんより
アカタチ 打ち上げ死体1点
貝塚市二色の浜 2011年1月21日採集
シマフグ 打ち上げ死体1点
貝塚市二色の浜 2011年1月26日採集



シマフグ

- ◆堀田浩平・佐原悠登・鳥井翼さんより
ヒガンフグ 生体1点
貝塚市二色の浜公園海浜緑地
2011年2月4日採集

<軟体動物>

- ◆三宅壽一さんより
キヌガサガイ
ギンタカハマ 他計6点
阪南市波有手浜 2011年1月28-30日採集

- アケボノキヌタ
ハツユキダカラ
キヌタアゲマキ 他計10点
阪南市波有手浜 2011年1月31日採集
ベニマテ 1点
ハツユキダカラ 1点
シドロ 1点
阪南市尾崎漁港 2011年2月1日採集

<甲殻類>

- ◆児嶋格さんより
カギツメピンノ 5点
岡山産サルボウに混入
2011年1月15日購入
- ◆森田みつ子さんより
ツノナガゴブシ 打ち上げ死体1点
貝塚市二色の浜 2011年1月20日採集
- ◆原田哲洋さんより
キンセンガニ 打ち上げ死体1点
貝塚市二色の浜 2011年2月6日採集

<昆虫>

- ◆五藤武史さんより
チョウセンカマキリ ふ化後卵囊1点
貝塚市脇浜 2011年1月8日採集
- ◆食野俊男さんより
オオカマキリ 卵囊1点
貝塚市千石荘 2011年2月27日採集

<写真>

- ◆石井葉子さんより
クロジ 1点
ソウシチョウ 1点
貝塚市千石荘 2011年1月9日撮影

◆食野俊男さんより

- カヤクグリ 2点
- クロジ 1点
- ハギマシコ 3点
- 和泉葛城山 2011年1月25日撮影
- ベニマシコ 1点
- 貝塚市千石荘 2011年2月4日撮影
- マヒワ 3点
- 貝塚市脇浜 2011年2月22日撮影
- マヒワ 1点
- 貝塚市脇浜 2011年2月23日撮影
- メジロ 1点
- 近木川下流 2011年2月25日撮影
- カヤクグリ 1点
- 貝塚市麻生中 2011年3月13日撮影
- ウグイス 2点
- シメ 1点
- ジョウビタキ 1点
- 貝塚市二色 2011年3月18日撮影
- カシラダカ 1点
- ウソ 1点
- カヤクグリ 1点
- オオマシコ 1点
- 和泉葛城山山頂 2011年3月22日撮影
- ソウシチョウ 2点
- 貝塚市千石荘 2011年3月31日撮影

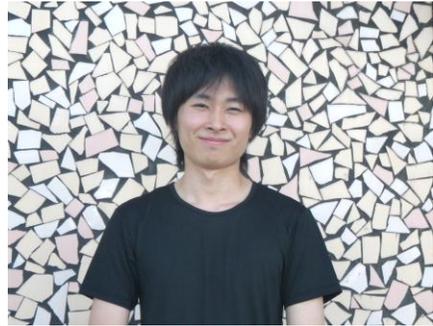
クロジは自然遊学館の記録として、貝塚市内で185種目の鳥類の確認となりました。ソウシチョウは環境省指定の特定外来生物で、これまで市内では和泉葛城山で報告がありました。

写真で鳥の同定をいただいた和田岳氏（大阪市立自然史博物館）および和田太一氏（南港野鳥園）に謝意を表します。

 新スタッフ紹介

今健参上！

4月から自然遊学館のスタッフとなりました、今健太といいます！みかんの国、愛媛県からきました！大阪府立大学の大学院で、昆虫、植物など、自然環境について学んでおります！昨年、博物館実習で自然遊学館にお世話になったのが縁で、アルバイトをさせてもらうことになりました。他のスタッフさん共々、みなさまのご来館を楽しみにしております！



どうぞ、よろしく!!!

 スタッフ日誌

1月8日、年越しの前、12月26日に遊学館にいる生き物の世話をして、ヒバカリは家に持ち帰りました。ところが1月4日に脱走して、居間のカーペットの下にもぐりこんでいました。無事に見つかりほっとしました。山田さんと岩崎さんが休み中の1月2日にも世話をしているので、どの生きものも無事でした。1月8日にヒバカリを自然遊学館に戻し、元気です。今年もがんばって飼育しますので、よろしく願います。（鈴）

 お知らせ

2月7日、全国の小さな博物館が集まって、各館が抱える問題点や協力の方法などを話し合う「第2回小さいとこサミット」(主催・自然遊学館わくわくクラブ、後援・西日本自然史系博物館ネットワーク、自然遊学館)が、関空交流館セミナールームで開催されました。遠方からも熱心な博物館学芸員が来られるということで、自然遊学館内の展示の見直しをし、説明文内の種数や種名変更などを約1週間かけて更新しました。当日の午前に何とか作業を完了することができました。普段から絶えず見直し作業をしていれば、あわてる必要はなかったのですが.....(岩)

3月11日、東日本に大地震・巨大津波が発生しました。その後、原発の事故も加わり、未曾有の大災害となってしまいました。被害を受けた博物館もあると聞きました。当館も海のすぐそばにあり、津波の被害は他人事ではありません。亡くなられた方々のご冥福をお祈りし、微力ながら復旧作業のお手伝いに何ができるか考えていきたいと思えます。(スタッフ一同)

3月31日、館内で飼育しているマダコの「みさきちゃん」が産卵しました。そして、母ダコの懸命な世話により、5月2日、一斉にふ化しました。表紙の写真を見ると仔ダコが生まれたことが分かりますね。でも、仔ダコの飼育は特別にむずかしいと聞きました。大丈夫かな?(鈴)

「貝塚の自然 第13号」が発行されました!

当館の年次活動報告書「貝塚の自然」第13号が発行されました。近木川、見出川、和泉葛城山の生きもの情報、ウミガメ展の報告、寄贈標本の紹介といった内容になっています。貝塚市の公民館、小中学校、泉州地域の図書館と高校に配布しています。

※ 生きものクロスワードの答え
(前号出題分)

ブ	ナ
リ	ス

ス	ギ	ナ
ズ	■	ズ
メ	ジ	ナ

ナ	ミ	ア	ゲ	ハ
ツ	■	ブ	■	キ
ア	ブ	ラ	ギリ	
カ	■	ゼ	■	バ
ネ	ズ	ミ	ゴ	チ

* 自然遊学館だよりのバックナンバーは、下記のホームページよりご覧いただけます。

自然遊学館だより 2011 春号 (No. 59)

貝塚市立自然遊学館

〒597-0091

大阪府貝塚市二色3丁目26-1

Tel. 072 (431) 8457

Fax. 072 (431) 8458

E-mail: shizen@city.kaizuka.lg.jp

<http://www.city.kaizuka.lg.jp/shizen/>

発行日 2011. 5. 25

この小冊子は市内印刷で作成しています。